

9月23日は「網膜の日」

「網膜の日」は、網膜色素変性症をはじめ、緑内障、糖尿病網膜症、加齢黄斑変性、網膜静脈閉塞症、網膜剥離など、さまざまな網膜の病気についての理解を深めていただき、疾患を抱える人たちとともに生きる社会づくりを考えていくため、2017年に日本記念日協会から認められました。

2017年9月30日(土)、公益社団法人日本網膜色素変性症協会が主催する「世界網膜の日 in 宮城」(会場:仙台市福祉プラザ)にて認定授与式が行われました。その後、全国各地で「網膜の日」の普及に向けた活動を展開しております。

◎なぜ9月23日？

9月23日は、昼と夜の長さがほぼ同じになります。そしてこの日を境に、夜が長くなっていき、暗い時間が増えていくことになります。

「明るさ」は、網膜の病気の抱える人たちにはとても重要です。夜が長くなると、歩ける時間がどんどん短くなります。仕事に行けなくなることもあります。網膜細胞が破壊されると、明るい昼間の長さということがとても重要になります。そのため、この日を「網膜の日」と定めたのです。

◎網膜の病気になると・・・。

私たちの眼の奥には「網膜」という光を感じる膜があります。

網膜が壊れると、モノがゆがんで見えたり、視野の中心が黒く曇ったり、目がぼやけるなどの症状が出ます。

また、暗いところで見えにくくなったり、視野が狭くなったりするため、日常生活に支障が出てきます。ところが、網膜の病気を抱えていても、周りの人からは分かりにくいので、十分な理解が得られず、いわれない差別を受けることもあります。

◎網膜の病気を抱えた人たちと生きるために

目の不自由な人が持っている白杖(はくじょう)。

これは、まったく目が見えない人だけが持っているわけではありません。

網膜の病気を抱えた人の「見え方」や病気の進行度合いはさまざまで、実際に五円玉の穴ほどしか見えていなかったり、歪んで見えたり、スマホを見ることができても、白杖を使わないと安全に歩くことができないのです。

しかし、そうしたことを知らない人から「見えているのに、見えないふりをしているのでは？」と思われ、誤解を受けることも少なくありません。

私たちは、「網膜の日」をきっかけに、網膜の病気を理解し、病気を抱えた人たちとともに生きていくために何ができるかを考えていくことが必要なのです。